

創世記 4 章 25 節をお開き下さい。『アダムは、さらに、その妻を知った。彼女は男の子を産み、その子をセツと名づけて言った。「カインがアベルを殺したので、彼の代わりに、神は私にもうひとりの子を授けられたから。」』

アダムは、さらに、その妻を知った、というのは、もう既に皆さんにもそれが何を意味するのかはお伝えしてあります。4 章 1 節においても『人は、その妻エバを知った。』とあります。人というのは勿論アダムのことです。アダムという名前の意味は、“人”という意味でもあります。そして「妻のエバを知る」というのは、勿論知識として初めて見知ったということではなくて、ここでは夫婦の関係を持ったということです。性交という言葉です。セックスということですが、それはまさに相手をただ肉体的に知るだけではなくて、人格的にも知ることであります。一心同体となるということで、体が 1 つになるだけではなくて心も 1 つになる。これ以上ない親密な交わりを持って、そしてその実として子供を授かっていくということなんです。そして、“さらに”ということで既にこの 2 人の間には性的交わりがあって、夫婦の営みがあって、多くの子供たちが与えられておりました。最初の子はカインとアベル。兄弟でありましたが、4 章ですとその話を見てきました。カインとアベルの兄弟物語です。そしてそれは聖書における最初の殺人事件という悲劇となっていくんですが、カインが弟のアベルを妬んで野原で手にかけてしまうという凄惨な事件が記録されておりました。そして、その後アダムとエバは勿論夫婦ですから何度となく性的な営みをもって、また多くの子供たちにも恵まれてきたということなんです。そして、“セツ”というのは、カイン、アベルに次いで 3 番目というふうに考える人がありますけれども、必ずしも 3 番目というわけではありません。聖書にはそのような事は明記していません。単純に「カインがアベルを殺したので、彼の代わりに（アベルの代わりに）、神は私にもうひとりの子を授けられたから。」と。アベル亡き後、特に妻のエバは相当な痛手を被っていたと思われます。他にも子があつたかもしれません。でもなかなかぽっかり空いたアベルのその喪失感、それを埋めるようなことはなく長年過ごしてきたかもしれません。でもこのセツが生まれてから、もしかしたらアベルに瓜二つだったのかもしれませんが。或いは何らかの点でアベルによく似ていて、アベルを思い起こさせるような、想起させるような何か特質を持っていたかもしれません。その辺は、聖書は触れていませんが、でも代わりになるほどの大きな存在となったということ、これは確かであります。ですから、まず多くの人が誤解していますけれども、長男がカイン、次男がアベル、そして三男がセツというふうに捉えがちですが、アベルの後にはもっと沢山の子供たちがいたと考えても差し支えないわけですし、問題ないわけです。

ここで今までの流れを思い出して頂きたいと思うのですが、先週まではカインの子孫たち、カインの末裔の歴史について学んできました。それはまさに神なき文明開花といった内容であったわけです。でも、突然この 25 節においてカインの子孫の話から、アベルの子孫の話に戻されると、急展開するということでもあります。何か唐突のような感じもしますけれども、それは勿論 5 章に繋がっていくことなんですが、これまで見てきた原福音というもの。つまり創世記 3 章 15 節の言葉を軸にこの 4 章 5 章を捉えれば、ここでの展開というのは急なものではありません。これは明確な対比というものです。対照的な 2 つの文化、2 つの文明。それが相反するもので、対抗するもので、衝突するものということ。それは全く交わることのないもの。光と闇のようなそういう関係です。それが女の子孫と呼ばれるものと、蛇の子孫と呼ばれる 2 つのものでありました。創世記 3:15 に『わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかどにかみつく。』これが原福音です。福音の本、福音の源流です。福音のプロトタイプというものです。そして、この女の子孫からメシヤが生まれてきます。そしてこの蛇の子孫、サタンの子孫の究極は反キリストで、イエス・キリストが世を裁くために再び戻って来られます。その時には反キリストの頭が踏み砕かれる。勿論それはサタン自身の頭が踏み砕かれるに等しいものとなります。イエスが反キリストを裁かれる時に、同時に悪魔も裁かれるからです。それが福音の内容に含まれていますので、私たちは既にキリストを信じる者として世に打ち勝った者、死に勝利した者、圧倒的な勝利者と見なされる女の子孫のラインに加えられた者、イエス・キリストに連なる者。これがクリスチャンであります。それはアベルの信

仰を継承している者とも言えます。アベルはイエス・キリストの雛形のような存在です。同じように羊飼いで、そして同じように人々から妬まれてイエスは十字架に掛けられ、殺されました。殉教したということです。そして、この蛇の子孫から女の子孫に話がここで展開しているということをもう一度確認して頂きたいと思います。前回の内容であれば、カインの末裔、つまり蛇の子孫は着実に子孫を増やしてその勢力を拡大していったという様子を見てきました。神なき文明が世界中に広がっていったところですよ。そして、それは現代にも影を落としております。

でも、だからといって女の子孫が、アベルが殺されてしまったことによって死に絶えたのではないということを今ちょうど **25 節**において確認出来ます。悪魔の思惑は外れたわけです。カインを使ってアベルを殺害すれば女の子孫は絶えるだろうと、そのように踏んだわけですが、でもその悪魔の思惑は外れました。アベルの代わりにセツが神によって与えられたわけです。そして、このセツからまたメシヤのラインが始まっていくわけです。実際にイエス・キリストの系図の中にもセツという名前が出てきます。アダムとエバにまた新たな希望が与えられたということです。アベルが殺されたことで絶望したわけです。そして、もしかしたら**原福音**が実現しないのではないかと。一抹の不安も感じてしまったかもしれません。神の言葉は確かだということは、頭では分かっているけれども現実があまりにも厳し過ぎると。あまりにも重過ぎると、なかなか頭では分かっていることが心にまで降りて来ない。引っ掛かったままで、最後まで信じ切れない、従い通せないという不信仰な思いもどこから湧き起こってしまうかもしれません。でも、神はここでセツという新しい希望を与えて、再びアダムとエバの信仰を奮い立たせようとしております。神様は蛇の子孫の好き勝手に成すがままにさせているわけではないということを皆さんにも覚えて頂きたいと思います。今も悪魔はこの世界で支配する者として、「この世を支配する者」とイエスは呼んでおります。またパウロは、サタンを「この世の神」と呼んでいます。まるでこの世は悪魔が牛耳っているかのように感じるがあると思います。でも、蛇の頭を踏み砕くメシヤが必ず来られるということ。この世は悪が増大しているように見えても、神はそのすべてを見過しているわけではありませんし、見て見ぬふりをしているわけではありませんし、それらの悪に対して手をこまねいて何も出来ない無力な状態にあるわけではありません。必ず**原福音**は実現します。女の子孫、約束のメシヤはやって来ます。2000 年前にも来られました。そして世の終りにも、今度は世を救うためではなくて、御子を拒否した者たちを、悪の勢力をすべて一掃するために、神の正義を樹立するために、この世に裁き主として戻って来られます。その時には蛇の頭は約束通り確実に踏み砕かれていきます。これは聖書に書かれている約束の言葉ですので、皆さんも信じて頂きたいと思います。見えるところはカインの子孫たちが闊歩^{かつぽ}しているように思うかもしれませんが。幅を利かせているように思うかもしれませんが。悪魔がもうやりたい放題やっていると。すっかり荒らされてしまっているように見えるかもしれませんが、それがいつまでも続くわけではないということです。彼らの隆盛は、彼らの栄えは、永続するわけではありません。いつか終わりがやって来ます。

そして、そのセツもどんな人物か皆さんに簡単にご紹介したいと思います。英語でセツのことを”Seth”と言います。比較的ポピュラーな名前となっています。英語圏というのはキリスト教世界において多大な影響を受けていますので、名前にも聖書の登場人物の名前がよく用いられているわけです。アベルもそうです。”Abel”と言ったり、なかなかカインとつける人はそんなにいないと思うんですが、でもないわけではありません。アダムもいます。セツもよく使われる名前なんです。その意味は「代わりに」というのが今読んだ **25 節**に出ています。それが由来です。“セツ”というところには*印も付いていますけれども、ヘブル語で“シェテ”、英語では”Seth”、日本語では、“セツ”というふうに発音していますけれども。意味は「代わりに」、或いは「定められた」「任命された」というものであります。これまでも名前の意味は、いろんな人の名前を紹介する際にそれぞれが豊かな意味を持っていて、文脈でどの意味を選ぶのか、採択するのかということでお話してきましたけれども、ここでは「代わりに」「定められた」「任命された」、それほど違いのないものですので、どれを採択しても差し支えないと思います。ハッキリしていることは、アベルの代わりに、ということです。「定められた」「任命された」という意味合いで命名されたものです。勿論アベルだけではなくて、カインもアダムとエバの息子には変わりなかったわけです。でも墮落してしまったカインは、もう失われた者となったわけです。アベルは殺されてこの世にはいなくなってしまうました。でも死後アベルは『アブラハムの懐』というところに

行って、その靈魂は生きているわけです。慰めを受けているわけです。一方でカインは神に真っ向から反抗して完全に墮落していますので、地上に生きてはいても完全に失われた人です。カインの行き先は、死後は神のもとではありません。そこはアベルと同じ所ではありません。そこは前回もお話した通り『ハデス』というところ。『ハデス』という場所で、地獄の待合室のようなところで、究極的には火の池と呼ばれる『ゲヘナ』にそこから送還されていくわけです。そういうカインも失われた者として、アダムとエバは悲しんでいたわけです。でもこのセツが与えられたので、その兄弟の代わりに、また**原福音**の役割を改めて果たすべくこのセツが代わりに任命されたと。女の子孫として蛇の頭を踏み砕くところの“**彼**”になっていくんだと。それがカインでもなかったし、アベルでもなかった。でもこのセツがそうってくれるに違いない。そういう期待を込めて“**セツ**”と命名したと考えられます。切なる願いです。切実な、切願というものです。

そして、**彼女が名付けた**というところに注目して下さい。『**彼女は(つまりエバは)男の子を産み、その子をセツと名づけて言った。**』名付けたのは彼女です。エバです。普通は父親が名前を付けるものです。でも聖書の中には特例として母親が息子に名前を付けるということも珍しくはありませんが、ここでは母親のエバが命名していることは確かです。ただ**5章2節**を見て頂くと『**男と女とに彼らを創造された。彼らが創造された日に、神は彼らを祝福して、その名を人と呼ばれた。**』なぜここを読んだかと言いますと、このアダムとエバ、夫婦は一心同体のもので、彼らはまさにここでは同じく“人”と呼ばれています。「**その名を人と呼ばれた。**」この“人”というのは、「**アダム**」という言葉ですから、その名を“**アダム**”と呼ばれた。男も女もアダムと呼ばれた。アダムとエバもふたりとも“**アダム**”と呼ばれたと。ですから夫婦は同権なわけです。ここに優劣はありません。男女の間には差別が無いということです。聖書的には夫婦は一心同体で、夫婦は同権です。エバが確かに特にここでは思い入れがあって、息子の名に“**セツ**”と付けましたけれども、それはアダムの預かり知らぬ所ではなかったということです。アダムも候補の名前があったけれども、それをエバが無視して自分の強い権限で願望によって押し通して無理に“**セツ**”と命名したわけではなくて、夫婦で話し合っただけで協議して納得した上で、これが神が自分たちに与えて下さった名前だと確信して命名したと考えられます。ただ敢えて彼女が名付けたというところで、エバのその思いがここに強く反映されているということが私たちにも伝えられています。聖書に出てくる人もいろいろな名前を持っていますけれども、ある出来事に基づいて付けられる場合もあります。あるいは預言された境遇によって名前が付けられたり、或いは何か希望を抱いて「この子にはこういうふうになって欲しい。」とか、或いは生来の性格を見て取って「こういう名前を付けよう。」将来の出来事を予見して、またそれを名前に反映させて「この子の将来にこういうことがあるに違いないから。」と、或いはその子が与えられている神の務め・天職、それを意識して名前を付けたりとか、いろいろな名前の付け方が聖書の中に出てきます。日本人も名前には大抵意味を持たせて命令すると思うんです。アメリカ人とか英語圏は、確かに聖書の登場人物から名前を付けることが多いんですけれども、あまり名前の意味はそれほど気にせず付けます。サウンドが良いからとか、そういうことでよく付けたりしますけれども、日本人の場合はすべての人ではないと思いますが、それなりに意味を持たせて命名するというのが一般的だと思います。ですからこの夫婦も、この“**セツ**”という名前には並々ならぬ思いを寄せて命名したわけですが、特にエバが思い入れが強かったという事は後で少し説明したいと思います。

5章3節にちょっと目を留めて頂きたいと思います。『**アダムは、百三十年生きて、彼に似た、彼のかたちどおりの子を生んだ。彼はその子をセツと名づけた。**』セツというのが、**アダムのかたちどおりの子**と。アベルにも似ていたということは言えると思うんですけれども、またそれ以上にアダムに似ていた。或いはアベルはよくアダムに似ていたというふうにも言えると思います。アダム、アベル、そしてセツ。もう誰が見ても親子と見て分かるような見た目だったかもしれません。或いは性質上もまさにアダムそっくりという感じで、アベルも、そしてセツも誰が見ても明らかにアダムと瓜二つというふうなイメージが、誰もが抱いて疑いがなかったと思います。特にこのセツは、アダムが130歳の時に誕生したとあります。アベルが殺されてからかなり年数が経っていることを示唆しています。アベルの殺害後セツが誕生するまでの間に、アダムとエバの間には多くの子供たちが生まれていただろうという事は先に触れましたけれども、カインが長男、次男がアベル、三男がセツではなさそうだとことです。その間にも沢山の息子たち、娘た

ちが生まれていて、その子どもたちの中で特にセツの誕生が、**原福音**の女の誕生を予感させるような特別な感情が特に母親のエバに働いたと思われます。この**5章3節**のセツの説明にも特別な意図を感じます。数ある息子たちの中でもセツは特別だったということです。子供を出産するエバにとって女の子孫と呼ばれるメシヤに対する期待度は並々ならぬものだったと思われます。エバの言葉が**4章25節**にあります。「**カインがアベルを殺したので、彼の代わりに、神は私に(エバに)もうひとりの子を授けられたから。**」“もうひとりの子”、特別な子という意味合いで使っています。3人目という単純な意味ではなくて、もうひとりの特別な子を授けられた。

第一テモテ 2:15も参照したいと思います。『しかし、女が慎みをもって、信仰と愛と聖さとを保つなら、子を産むことによって救われます。』これではまるで子供を産めない女性は救われないのではないかと誤解する人もありますが、そこは文脈を見て頂きたいと思います。時間がないのでここは詳しく説明することは避けますけれども、ここで言われている“女”というのは、ずっと文脈を辿っていきますと、前に遡っていきますと、夫婦のことを言っていて、女は妻で特にここではエバのことを指しています。アダムという名前が前節の**14節**にも見られます。『アダムは惑わされなかったが、女は惑わされてしまい、あやまちを犯しました。しかし、女が慎みをもって』とこう続きますので、明らかに文脈上ここで言う“女”は女性全般を指しているのではなくて、特にエバを指しています。エバからメシヤのラインが始まっていくわけです。ただ“女の子孫”というのは、文字通りは「女の種」「女の精子」という意味になります。それは実はエバのことではありません。それは男性を介さず処女のまま種を宿するという特別な女性です。それはもう言うまでもないわけですが、あのイエスの母マリヤのことです。マリヤも実は系図を辿っていくと、当然アダムの子孫、アダムとエバの子孫ということになります。エバは自分の子供の中からメシヤが現れるやも知れぬと、常に出産の度にそういう期待を持っていたわけです。そうすればすべての悪が一掃されると。カインの姿を見て落胆したわけです、愕然としたわけです。それが自分たちが撒いてしまった種の現れなんだと。自分たちではもうどうにも出来ない、どうにももう解決出来ないほどカインの末裔たちがはびこってしまって、その悪の勢いをどうにも出来なくなっていたわけです。それを止められるのは女の子孫、約束のメシヤだけだという信仰がありましたので、エバは出産の度に期待していたわけです。でも息子を産んでもその都度がっかりしていたわけです。名前こそ出てきていませんが、何人も息子が生まれたと考えられます。そしてアダムが130歳の時にセツが生まれた時には、「この子に違いない。」と、そのような確信が持てたような、それがどんなものだったのか分かりません。でも、エバはアダム以上に何か強く特別な感情を抱いたということがここから窺い知れます。

そして結果的にセツは約束のメシヤになれたのかと言うと、そうではありませんでした。残念ですね。また当てが外れたということです。実際に**ヘブル人への手紙 11章**に信仰者の殿堂というものがあります。信仰者列伝というのが**ヘブル人への手紙 11章**に記録されています。そこもアベルのことを語る時には、触れたところであります。**4節**のところに『信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、そのいけにえによって彼が義人であることの証明を得ました。神が、彼のささげ物を良いささげ物だとあかししてくださったからです。彼は死にましたが、その信仰によって、今もお話しています。』アベルは信仰の人だったということです。一方でカインは不信仰の人だったということが分かります。その後にセツの名前が出てきそうなんですが、セツは出て来ません。そして**5節**には『信仰によって、エノクは死を見ることなくように移されました。神に移されて、見えなくなりました。移される前に、彼は神に喜ばれていることが、あかしされていました。』そして『信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならぬのです。』カインの捧げ物には信仰が1つも伴っていませんでしたので、神には全く喜ばれなかったということが分かります。一方でアベルの捧げ物には信仰が伴っていたので、神に喜ばれて受け入れられたということです。それが気に食わなかったのがカインはアベルを妬んで手にかけたということで説明しました。でもセツの名前はここに出てきません。勿論旧約聖書の登場人物全員がここに出てくるわけではないんですが、ただセツがアベルに並ぶ者ではなかったということです。エノクというのは、アダムの子孫ですけれども、特筆すべき人物としてここに挙げられています。詳しい事はまた**創世記 5章**でエノクのことは見たいと思います。アベルの後いきなりエノクにまで飛ん

でしまっているわけです。セツは省かれています。勿論セツが不信仰の人だったというわけではないと思います。ただアベルに代わるような信仰者ではなかったということは1つ言えるかもしれません。むしろエノクの方が際立っていたということです。少なくとも信仰者としては、アベルやエノクには及ぶことのない人物だったということです。

もう1つ言えることは、人を偉大にするのは信仰だということも、併せて覚えて頂きたいと思います。偉大な功績は信仰によるものであるということです。『いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で1番優れているのは愛です。』と、**第一コリント 13:13**に書いてありますが、いつまでも残るものとして、真っ先に信仰が挙げられています。ですからこの信仰によるのでなければ、いつまでも残らないということです。ですからその信仰が特筆すべきだったということで、アベルの名前、そしてエノクの名前がここに挙げられています。でも、残念ながらセツの名前は挙げられておりません。勿論セツは神を信じた者で、実際にセツのラインから、家系から約束のメシヤと呼ばれる、イエスが生まれてくるわけです。勿論その前に信仰の父と呼ばれるアブラハムもこのセツの子孫となっていくます。ですからセツ自身の信仰が特筆すべきもので、彼が信仰的に偉大な人物だったからということで、この**創世記 4章 25節**に特別に名前が挙げられているというよりもそのセツの子孫から信仰の父と呼ばれるアブラハム。そしてひいては約束のメシヤがアブラハムの子孫として生まれてきますので、そのルーツとしてセツの名前が挙げられていると。それがセツの位置付けということになろうか思います。

テキストに戻って頂きまして、今度は **26節**です。『セツにもまた男の子が生まれた。彼は、その子をエノシュと名づけた。そのとき、人々は主の御名によって祈ることを始めた。』『セツにもまた男の子が生まれた。』とありますが、**5章 6節**を見て頂くと『セツは百五年生きて、エノシュを生んだ。』とあります。105年生きて、初子としてエノシュを生んだわけではなさそうです。セツにも沢山の息子たち、娘たちが先にあって、セツが105歳の時に特別な息子エノシュが生まれたということです。ですからこのエノシュも何らかの特別な役割を果たしたと思われます。無名の子供たちも勿論神様は用いて下さったに違いありませんけれども、聖書に記録されている限りここに挙げられているセツという名前、またエノシュという名前。数ある子どもたちの中では特別な人物として特別な役割を果たしたと考えられます。ですから聖書にこれだけの名前しか出てこないの、これだけの人しか生まれて来なかったかのように勝手に断定してしまう人がありますけれども、そうとは限らないということです。

このエノシュの命名に関しては、父親のセツが行っております。セツがエノシュと名付けたということです。その“エノシュ”の意味なんです「死ぬべき」。息子に、死ぬべき。生まれた途端に。あなたの名前は「死ぬべき」、或いは「致命的脆弱・弱さ・惨めさ」。息子にそんな名前をつけるのは、ちょっと考えられませんね。そして、この“エノシュ”は普通名詞で使いますと、聖書の中では「人」と訳されます。“アダム”も「人」と訳されるんですけども、他にも「人」と訳すヘブル語で“エノシュ”というのがあるんです。固有名詞でここでは“エノシュ”と使っていますが、普通名詞でも“エノシュ”と言って、それは「人」と訳されます。或いは「人間」と訳されます。実際に**創世記 6章 4節**に使われています。『神の子らが（これは墮落した天使のことを言います。またその時に詳しく説明します。）、人の娘たちのところにはいり（この“人の”というところが、ヘブル語の“エノシュ”です。）』また**ヨブ記 5:17**。『ああ、幸いなことよ。神に責められるその人は。だから全能者の懲らしめをないがしろにしてはならない。』『その人は”人”の人、これがヘブル語の“エノシュ”。また同じく**ヨブ記 14:19**。『水は石をうがち、大水は地の泥を押し流す。そのようにあなたは人の望みを絶ち滅ぼされます。』『“人の望み”の人、これが“エノシュ”。今度は**詩篇 9:19～20**を開いてみて下さい。『¹⁹主よ。立ち上がってください。人間が勝ち誇らないために。国々が御前で、さばかれるために。²⁰主よ。彼らに恐れを起こさせてください。おのれが、ただ、人間にすぎないことを、国々に思い知らせてください。セラ』ここに“人間”という言葉が2回出て来ますが、これが“エノシュ”です。また同じく**詩篇 103:15**。『¹⁵人の日は、草のよう。野の花のように咲く。¹⁶風がそこを過ぎると、それは、もはやない。その場所すら、それを、知らない。』これまで見てきた聖句は、人間の弱さ、脆弱さ、貧弱さ、脆さを語るものであって、まさに“エノシュ”は「死ぬべきもの」「致命的脆弱・弱さ・惨めさ」ということです。それが人間の本质でもあるということです。ついでに**詩篇 103:14**には『主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。』ちりに過ぎないのです。吹けば飛んで消えてなく

なる。『人の日は、草のよう。野の花のように咲く。』いつか枯れるものです。今は咲き誇っているように見えます。いつか枯れるんです。それが現実であります。私たちも“エノシュ”だということを忘れてはなりません。いつまでも元気じゃないんです。いつまでも若くはないんです。私たちは死ぬべきものです。オギャーと生まれた瞬間から死が始まるわけです。この“エノシュ”の語根には、“アナシュ”という言葉があって、その“アナシュ”というヘブル語は厳密には「癒すことの出来ない状態。癒せない傷や病気。癒せない悲しみ。」を表します。また避けることの出来ない悪や災難も意味します。それがまさに人間であり、人生であります。癒すことの出来ない状態。癒せない傷や病気。癒せない悲しみ。避けられない悪や災難。いろんな病気をして、闘病生活を送って、何とか或いは見事に克服したという人もあるかもしれません。でもまた新たな病気にかかるわけです。そして確実に老いていくわけです。昨日までピンピンして元気だった人が、突然亡くなることもあります。突然災害に見舞われます。一瞬にしてそれまで毎日目にしていたものがすべて跡形もなく消えて無くなってしまふ。そんな事は非現実的なことではなくて、非常に身近なことだということを、特に日本人の私たちにはよく分かると思います。これからも未曾有の災害が確実にやってきます。毎回毎回“想定外”という言葉が紙面に踊ると思います。予測以上だったと。とても防ぎ切れない。予測も出来ないし。そういうことが人生に多々あるし、それは避けられないものです。なぜセツは息子に“エノシュ”なんていう名前をそもそも付けたのか。不思議に思うと思います。確かにそれは人間そのものであり、人間の本質を表し、人生とは如何なるものかを言い当ててはいますけれども、何も息子に付けなくてもいいだろうと。でも特にセツは人間の儂さ^{はかな}さというものを、脆さというものを切実に実感したと思われまふ。この時代の人たちは、創世記 5 章を見ても分かります通り、それぞれが 1000 年近く生きているわけです。1000 年も生きているわけです。現代人であればせいぜい 100 年ぐらいと。最近のニュースでは、人間の寿命は 125 歳が限界であると。皆さんもニュースで見たかもしれません。ある一定の時期までは、確か 93 年か 97 年か定かではないですけども、そのぐらいまではずっと寿命は延び続けたわけですが、でもそれ以来だんだん寿命が頭打ちになって、むしろ下がってきていると。だから 125 歳がもう限度であるというふうに言われたりしています。ただ医学的には、実際に人間は 1000 歳生きられるポテンシャルを持っているということは既に実証されていますので、条件さえ揃えば 1000 年生きるというのは何も特別なことではないということです。創世記を見て人間が 1000 歳近く生きているなんて見ると、「これは荒唐無稽な話でただのおとぎ話。神話だ。人間がそんな 1000 歳近くも生きられるはずがない。」と。でもそれは一昔前の話であって、最新の医学の見地によればそういう 1000 歳というのは、何も夢物語ではないということです。とりわけアダムとエバが創造された当初の世界というのは、今とは全く環境が異なります。今ほど有害なものはなかったわけです。ですから条件は揃っていたわけです。いずれにしても 1000 歳近く人が生きたとしても結局最後は死ぬだけだ。それはあまりにも空しい。セツは生きて、それがよく分かったわけです。そしていよいよ 105 歳ぐらいの時にエノシュを生んだ時、もうそのことが頭から離れなくなって、息子に“エノシュ”と命名せざるを得なくなるほど行き詰まったということです。エバの期待であれば、セツは約束のメシヤになるはずだったんです。期待をかけられたと思います。でも実際には、期待に添えなかったわけです。セツにはそんな力はなかったわけです。同時に人間の脆さ、弱さ、儂さ、惨めさに打ちひしがれてしまったということです。それで思わず息子には“エノシュ”と。ただ、このエノシュは特別な子どもとなっていきます。

ここで適用という話をしたいと思うんですが、そういう話を聞いても全然自分の生活とは関係ないというふうには思わないで頂いて、私たちも“エノシュ”という人間であるということ。そして私たちは神なしでは、創造主を知らないまままではただの“エノシュ”だということ。でも、もし私たちがこの神を知れば、ただの“エノシュ”の死ぬべき者ではなくて、生きるべき者に変えられると。イエス・キリストを信じる者は死んでも生きるのです。これがヨハネの福音書の 11 章 25～26 節の約束の言葉にあります。イエス自身の言葉です。『²⁵わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。²⁶ また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。』このイエスの言葉が確かだということを私たちクリスチャンは知っております。“エノシュ”でも約束のメシヤ、イエスを信じれば、死んでも生きる。これが私たちの希望です。永遠の命という死にも打ち勝つ新しい命が、御子と同じ命が信じる者に授けられるということです。ですから生まれた時から私たちは皆“エノシュ”だったわけです。自分の罪の中に

死ぬべき者だったと。これが新約聖書のエペソ人への手紙の 2 章 1 節以降に書いてあります。『¹あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって(まさに“エノシュ”だったわけです。)、² そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。(この“空中の権威を持つ支配者”、“不従順の子ら”というのは、悪魔・悪霊のことです。)³ 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。』これは神の御怒りのことです。罪人ですから神の怒りを受けてしかるべきです。言い方を変えれば、生まれながらに地獄行を宣告されていた者ということです。私たちは聖書によれば皆生まれながらに罪人であると。罪を犯すから罪人になるのではありません。罪人だから罪を犯すわけです。だから小さな子供にも罪が何たるかを教えなくても、罪の犯し方を詳しく説明しなくても、自動的に罪を犯すわけです。どこからそんなことを仕入れてきたのか。そのアイデアはどこから来ているのか。誰が^{そそのか}唆したのかと。そう思って「まさか、うちの子が。まさか、うちのエンジェルちゃんが。」と思うかもしれませんが、違います。罪人ですから当然なんです。だから平気で嘘をつきます。だから平気で暴力をふるいます。世界は自分を中心に回っていると赤ちゃんの時からそう思っています。夜中だろうと何だろうと泣き叫びます。周りのことなど考えません。自分のことしか考えません。それがまさに罪人です。赤ちゃんだから可愛いと思うだけで、その赤ちゃんが大きくなったらどうでしょう。自分が世界の中心です。いつも泣きわめきます。思い通りにならないと地団駄を踏んで。

そういう死すべき私たちは、その後エペソ 2:4 に『⁴しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、⁵ 罪過の中に死んでいたこの私たちを(エノシュを)キリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——⁶ キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。⁷ それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜わる慈愛によって明らかにお示しになるためでした。⁸ あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。⁹ 行ないによるものではありません。だれも誇るものがないためです。』恵みのゆえに信仰によって救われた。行いによるのではないです。恵みのゆえにです。恵みと行ない、これは正反対の言葉です。対義語です。行いのあるところには、恵みは閉め出されてしまいます。自分で頑張って何とかしようとする。そこには神の恵みは体験されません。でも自分は何も出来ない。その時に神の恵みが注がれます。自分で自分のことを救うことは出来ません。誰も自分の罪の借金を返済することは出来ません。そして自分自身を永遠の滅びから永遠の命に移すこと、つまり地獄から天国に移すことは自力では出来ないということです。でもその行ないが全く力を失う時、神の恵みがそこに注がれます。絶望の最中、神の恵みがそこに注がれます。エノシュにも神の恵みが注がれるわけです。死ぬべき者にも神の恵みが注がれて生かされるということです。これが救いであります。だから救いは恵みによるのです。私たちの犠牲だとか、努力とか、修行だとか、苦行によるものではありません。いくら多額のお布施をしても、いくら免罪符を買っても天国には行けないわけです。ただイエス・キリストが私たちの代わりに、まさに“セツ”になって、罪のない方が罪を負われて十字架の上で死んで、その罪のない命を代価として支払って下さったがゆえに罪の借金はすべて弁済されたんです。私たちが払えなかったものを代わりに払って下さったんです。だから私たちは罪の借金を棒引きにされた、帳消しにされた者。つまり罪なしとみなされるわけです。これは奇跡です。あり得ない話です。だから私たちは罪のない者として晴れて天国に行けるようになるわけです。罪人は天国に行くことは出来ません。そこが信仰によって受け取るということになります。イエスの成されたことを我がためであった、と信じること。イエスの成されたことを個人的に受けとめる。永遠の命というプレゼントを受け取ること。それが信仰ですから難しいことではありません。小さな子どもでも出来ることです。努力とか、犠牲は一切必要ありません。恵みのギフトですから、相応しくない者に与えられる過分な親切です。分不相応な者に与えられる過分な親切、これが恵みですので、有り難く頂戴すればいいわけです。あなたが何者でも構いません。もう生まれながらに罪人だと言われていますから、どんなに背伸びしても皆同じ罪人です。良い人に見えても、神の目からは皆同じ罪人です。皆死刑囚です。死刑囚がお互いに、誰が悪い、どっちが悪い、より悪いかなんてこと

を言っても、所詮は死刑囚ですから皆同じ運命です。だから空しいばかりです。人と比べるなんていうことは空しいばかりです。どんぐりの背比べもいいところです。それで優越感に浸ったり、劣等感に陥ったり。それは空しい限りの話です。そうではなくて私たちは自分自身を罪のないイエス・キリストと比べるべきです。イエスと比べて自分はどうか。イエスは神の子ですから、神に愛され、神に受け入れられる者です。聖なる者です。勿論天にいらっしゃいます。その方のようにでなければ、誰も神の子どもにはなれないわけです。そうなった場合、私たちは皆絶望するしかありません。でもさっきもお話した通り、イエスを信じる者には神が救いを与えて下さいます。救われた者は栄光から栄光へとキリストと同じ姿に変えられる。これも聖書の約束でありますから、しかもそれは私たちの行ない、働きではなくて、御霊なる主の働きによると。神が働いて下さるのです。それが信仰生活ですので、それを神様に委ねていく。自助努力によるのではなくて、神の助けを得ながら神の導きに従って身を委ねて、神様が働きやすいように私たちは自らを差し出していく。それが信仰生活です。それを邪魔するのが私たちの行ないです。ちょっとでも出来ると思ったら神の恵みは注がれません。自ら神の恵みを拒んでしまうことになります。

話を戻したいと思います。テキストの**創世記4章26節**に戻っていただいて、続きに『**そのとき、人々は主の御名によって祈ることを始めた。**』とあります。“そのとき”というのは、エノシュの時代に、ということです。エノシュの時代の人々は主の御名によって祈ることを始めた。主というのは太字になっています。旧約聖書でこの太字のゴシック体の“主”は、神の個人名“ヤーウエ”という固有名詞を表しています。“ヤーウエ”と実際に読むかどうかは断定は難しいのですが、文語訳聖書では“エホバ”となります。エホバの証人も“エホバ”という神の固有名詞を使用しております。ただ「ハレルヤ」という言葉、或いは聖書の中に原語ですと「ヤハ」という言葉が多用されているんです。日本語ではそこは“主”と訳されているんですが、「ヤハ」というのが神様の名前に含まれている。「ハレルヤ」というのは、“ヤーウエ”の“ヤ”の短縮形です。ハレルエ、じゃないんです。「ヤハ」となっていますから、「エホ」じゃないんです。ですから「ヤハ」までは恐らくは合っていると思います。続く“ヤーウエ”の“ウエ”が、“ヤーベ”なのか“ヤーウエ”なのか、そういう意見も違いがあります。英語では“Jehovah”と言ったりしますが、それはそのまま文語訳で“エホバ”と音訳されているわけです。いずれにしても神の固有名詞を使って祈ることを始めた。

そして“御名”のところに新改訳聖書は*印が付いていて欄外の方には、直訳「御名を呼ぶことを」とあります。“祈る”という言葉は新改訳聖書で使っている訳で、これはどちらかと言うと直訳ではなくて意識となっています。実際に口語訳聖書では『**この時、人々は主の名を呼び始めた。**』と訳しています。また新共同訳聖書も『**主の御名を呼び始めたのは、この時代のことである。**』と訳しております。新改訳だけが勝手に『**主の御名によって祈ることを始めた。**』と、勝手にという語弊があるかもしれませんが、翻訳者たちが主観を持って「それは祈ることを意味するんだ。」と断定してそのように訳したわけです。でもそれは主観でしかないということです。直訳は「呼び求める」。その「呼び求める」は何を意味するのかということを今から少しお話ししたいと思います。流れとしては一般的に『**この時に定期的に公に公的礼拝が始まった。**』と理解されます。多くの注解書ではそのように説明されます。皆さんもそういう解説を聞いたことがあると思いますし、そういう説教を聞いたことがあると思います。このエノシュの時代から人々は定期的に集まって公の公的礼拝を捧げるようになったと。流れの中では、その邪悪なカインの末裔の神なき文明の繁栄の最中に、神を敬うセツの子孫たちは神中心の文明を築いて、その中心は神礼拝だったということです。文脈を見るとそれに沿っているように思うわけです。

ところが、ある人たちはこの箇所と**出エジプト記6:3**を見て矛盾を見る人がいます。**出エジプト記6:3**を参考までに開いて頂きたいと思います。『**わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに、全能の神として現われたが、主という(太字の主ですから“ヤーウエ”という)名では、わたしを彼らに知らせなかった。**』これは2節も見て頂くと『**神はモーセに告げて仰せられた。**』とありますから、モーセの時代の話です。後代になってから、大分時を経ているわけです。ここで「ヤーウエという名では知らせなかった。」この時初めて神がご自身の特別な個人名、固有名詞の“ヤーウエ”でご自身を現されたかのような印象を受けます。聖書をあまり読んだことない人がここだけ読むと、**出エジプト記6:3**だけ読むと、今までは“ヤーウエ”という名前はほとんど明かされなかった。これはシークレットだった。でもここで初めて

“ヤーウェ”という名前が公にされたと。そういうふうに読めてしまうかと思います。そういう印象を皆さん受けてしまうかと思います。実はこのような訳し方自体が誤解を生むものであります。本来はこの箇所は反対語疑問形に訳されるべきところです。すなわち『主という(ヤーウェという)名では、わたしを彼らに知らせなかったのか?』という反対語疑問形です。『ヤーウェという名では、わたしを彼らに知らせなかったのか?』という質問です。そして質問の答えは明らかに肯定的な答え。つまり「そうだ、知らせたのだ。」と。『主という名では、わたしを彼らに知らせなかったのか?』『いや、そんなことはないでしょう。何度となく伝えてきました。もうヤーウェという名前を知らない人はいないはずだ。』という。実際にモーセ以前に、アブラハムや歴代のイスラエルの族長たちも皆、主の御名である“ヤーウェ”を知っておりました。そして、この創世記 4 章 26 節ではさらに遡って原始の時代、エノシュの時代にも主の“ヤーウェ”の御名は知られていたということが示唆されています。

ただ 1 つ疑問に残るのは、エノシュ以前の時代には“ヤーウェ”の御名によって祈ることはそれまでなかったのか?ということです。創世記 4 章 16 節を見て下さい。『それで、カインは、主の前から去って、エデンの東、ノデの地に住みついた。』主というのは太字ですから“ヤーウェ”です。“ヤーウェ”はカインにも現れていました。

そして、その前の 15 節。『主は(ヤーウェは)彼に(カインに)仰せられた。「それだから、だれでもカインを殺す者は、七倍の復讐を受ける。」そこで主は(ヤーウェは)、彼に出会う者が、だれも彼を殺すことのないように、カインに一つのしるしを下さった。』

そして、13 節に『カインは主に(ヤーウェに)申し上げた。「私の咎は、大きすぎて、にないきれません。』

9 節に今度は戻って頂いて『主は(ヤーウェは)カインに、「あなたの弟アベルは、どこにいるのか。」と問われた。カインは答えた。「知りません。私は、自分の弟の番人なのではないでしょうか。』

さらに遡って 4 節。『また、アベルは彼の羊の初子の中から、それも最良のものを、それも自分自身で、持って来た。主は(ヤーウェは)、アベルとそのささげ物とに目を留められた。』

そして、3 節。『ある時期になって、カインは、地の作物から主への(ヤーウェへの)ささげ物を持って来た。』

1 節に『人は(アダムは)、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、「私は、主によって(ヤーウェによって)ひとりの男子を得た。」と言った。』アダムとエバも“ヤーウェ”という名前を知っているわけです。実際に「ヤーウェによってひとりの男子を得た。」と。これはカインの命名にもヤーウェの名前が関係したわけです。“得た”というのが「カイン」という名前の意味でした。でもその得たのは、主によってと。ヤーウェによって、ということを明確にアダムとエバは認識していたわけです、理解していたわけです。

2 章、3 章もずっと今まで見てきましたが、その中に何度となく、“神である主”、“神である主”というフレーズが出てきました。ちなみに 3 章の終わりの 23 節のところに『そこで神である主』、22 節にも『神である主』、14 節にも『神である主』太字の主ですから“ヤーウェ”。これは 3 章にもいっぱい出て来ますし、その前の 2 章にもいっぱい出て来ます。ですからアダムとエバも主という“ヤーウェ”という名前は知っていたわけです。カインとアベルも知っていたわけです。セツも勿論ですし、エノシュも勿論ですし、モーセ以前の人たちも皆、“ヤーウェ”という神の固有名詞、個人名は知っていたということです。ですから出エジプト記 6:3 は矛盾ではなくて、実際に訳し方に問題があって、『主という(ヤーウェという)名では、わたしを彼らに知らせなかったのか?』という質問が、もう明らかな肯定的な答えを引き出すものとして、「そうだ。私は既に知らせていたのだ。」というそういうニュアンスで使われています。初めて明かされた名ではないということです。

ただ出エジプト記 3:13~15 のところに、その“ヤーウェ”という名前の由来は何なのか? 意味ですね。日本語では主と訳していますが、それは意味ではありません。出エジプト記 3:13。そこに神は“ヤーウェ”という名前の意味、これをモーセに伝えました。『¹³ モーセは神に申し上げた。「今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました。』と言えば、彼らは、『その名は何ですか。』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか。』¹⁴ 神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという

方が、私をあなたがたのところに遣わされた。』と。」¹⁵ 神はさらにモーセに仰せられた。「イスラエル人に言え。あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主が（ヤーウェが）、私をあなたがたのところに遣わされた、と言え。これが永遠にわたしの名、これが代々にわたってわたしの呼び名である。』この神の呼び名、それは代々に渡って呼ばれる神の呼び名です。それが『わたしはある。』という者である。これが実は“ヤーウェ”という名前の由来、意味になります。“ヤーウェ”とは『わたしはある。』という者である。厳密には『わたしはなる。』という、“ある”というよりも“なる”。英語で言う“becoming one”という意味です。ですから、何かになって下さる、というのは何となく分かるんですけども、何になるのかというのがちょっと不可解です。明確には記されておりません。でもその神の不可解な、不明瞭な“ヤーウェ”という名前。『わたしはある。』という者である。若しくは『わたしはなる。』という者である。という名前を明らかにされたのが、神の御子イエス・キリストであります。ハッキリとその名が何を意味するのか。それを示されたのが、イエス・キリストというお方です。後でもその箇所は見たいと思うんですけども、イエス・キリストがこの“ヤーウェ”という名前の意味をさらに明らかにされたというのが、福音書の内容であります。

話を戻して、アダムとエバは、ですからこの“ヤーウェ”の御名は当然知っていたので、息子たち、孫たち、曾孫たちにも当然伝えていったわけです。信仰は継承されていったわけです。ただこの**創世記 4 章 26 節**の『**人々は主の御名によって祈ることを始めた。**』ということから、「“ヤーウェ”の名前は知っていても、“ヤーウェ”の名前で祈ることはまだしていなかった。」と解する人もあるわけです。このエノシュの時代の人たちから、初めてヤーウェの名前を使って祈るという方法と言いますか、祈り方を始めた。そういう理解も成されます。それは可能かと思います。ただこの“祈る”という言葉なんですが、先ほども＊印でそれはむしろ「御名を呼ぶこと」と新改訳では欄外に直訳ということで、口語訳にしても、新共同訳にしても「呼び求める」とか「呼び始めた」と訳していると言いました。

同じ言葉が原語では“カウラウ”というヘブル語なので、**ヨエル 2:32**に同じ言葉が使われています。**ヨエル書**の中に最も有名な聖句と言って良いと思います。『しかし、主の名を呼ぶ者はみな救われる。』太字の主ですから、ヤーウェの名を呼ぶ者はみな救われる。どこかで聞いたことがあると思います。ヨエル書というのは初めて聞いたという人もあるかもしれませんが、でもこのヨエル書の中の **2 章 32 節**の『主の名を呼ぶ者はみな救われる。』というフレーズは、どこかで聞いたことがあるし、ヨエル書では読んでいないけれども、他の箇所ですんだ気がするという人もあると思います。それもそのはずで、新約聖書の中に繰り返しこの箇所は引用されているからです。**ローマ 10:13**。『「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。』この“主”というのは、新約聖書ですと普通字の“主”になっています。旧約聖書では太字の“主”ですから、ヘブル語ではヤーウェです。でも新約聖書はギリシャ語なので“ヤーウェ”という言葉を使っていません。“クーリオス”というのがギリシャ語なんですけども“主”という御名です。ただ、その“主”というは**ローマ 10:9**を見て頂くと『なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。』その『「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。』と。ヤーウェは、ここではイエスと言われています。

また、使徒の働き **2:16～17**。『¹⁶これは、預言者ヨエルによって語られた事です。¹⁷『神は言われる。』その後ずっとヨエル書の引用が始まります。ヨエル書 **2 章 28 節**からの引用です。そしてその引用の最後のところ、つまり **21 節**。そこに『しかし、主の名を呼ぶ者は、みな救われる。』そして、その“主”とは勿論その後を読んで頂くと『²² イスラエルの人たち。このことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと、不思議なわざと、あかしの奇蹟を行なわれました。それらのことによって、神はあなたがたに、この方のあかしをされたのです。これは、あなたがた自身をご承知のことです。²³あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。²⁴しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。』その続きもずっと読んで頂くと、この“主”というのがイエスだということが分かります。イエスの御名を呼ぶ者は救われる。“呼ぶ”というところが、原語の“カウラウ”という言葉が使われているわけです。ヘブル語ですと「呼び求める」「呼ぶ者」「カウラウ」。ですから口語訳とか、新共同訳は直訳しているわけです。新改訳だけ「祈ることを始めた」というふうに訳してしまっています。

アダムとエバも間違いなくこの“ヤーウェ”の御名を呼び求めたから救われたわけです。彼らがそれをしないで、エノシュの時代の人々がそれを初めてしたわけではないということです。エノシュの時代になって初めて公的な礼拝が始まったと解する人たちは、決まった場所に祭壇を築いて定期的に公の礼拝を開始したと理解するようなんですけども、アダムとエバもエデンの園の入り口に、東の方に、いのちの木を守るケルビムと火と剣が回っているところ、恐らくはその付近で定期的に生贄を捧げていたと考えられます。生贄を捧げるということは、礼拝を捧げるということです。そして息子たち、カインもアベルも同じところで定期的に主への、“ヤーウェ”への捧げ物を奉納しています。これが創世記 4 章の内容でした。ですから祭壇は既に築かれていたわけです。そして定期的な礼拝も既に行われていたわけです。エノシュ以前から実は決まった場所で定期的に公の礼拝は捧げられていたわけです。公というのは、カインとアベル、プライベートではなくてそれ以外にも大勢のアダムの子どもたちが存在していたということは先ほど触れましたので、確かにアダムの子孫だから家族礼拝に過ぎないじゃないですか、と思うかもしれませんが、家族礼拝と言っても 5、6 人ではないです。十数人でもありません。数百人でもありません。数千人、数万人、既に居たということです。或いは数十万人、少なく見積もっても 10 数万人居てもおかしくないわけです。

もう公の礼拝は捧げられていたということで、このテキストの創世記 4 章 26 節の意味というのが不可解になるわけです。『そのとき、人々は主の御名によって祈ることを始めた。』直訳は『主の御名を呼び求めることを始めた。』どのように訳したらいいのか、どう理解したらいいのか、という話になるんですが、この“始めた”という原語は、ヘブル語では“ハウラル”と言います。この“ハウラル”という言葉は、いろんな意味があります。少なくとも 4 つの意味がありますので、1 つは「始める」、これは確かです。もう一つは「刺し通す」。実際にこの「刺し通す」と訳されている箇所はイザヤ 53:5 です。そこに“ハウラル”というヘブル語が使われています。皆さんもよく知っている箇所だと思います。『苦難のしもべの歌』イエスの苦しみがあらかじめイエスが生まれる 700 年も前に預言されていたという箇所です。イザヤ 53:5『しかし、彼は(この“彼”というのは、女の子孫、約束のメシヤ、イエスのことを言っています。)、私たちのそむきの罪のために刺し通され(この“刺し通され”の部分にヘブル語の“ハウラル”。今私たちが創世記 4:25 では「始めた」というふうに訳している同じ原語です。)、私たちの咎のために碎かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。』

今度は詩篇 109:22。『私は悩み、そして貧しく、私の心は、私のうちで傷ついています。』『傷ついています』というところは * 印が付いていて、欄外には「あるいは『刺し貫かれている』」とあります。これもヘブル語は“ハウラル”です。ですから「刺し通す」とさっき訳した箇所と全く同じです。

また第一列王記 1:40。『民はみな、彼のあとに従って上って来た。民が笛を吹き鳴らしながら、大いに喜んで歌ったので、地がその声で裂けた。』この中の“笛を吹き鳴らす”。ここに“ハウラル”が使われています。全然違う意味です。

もう一つ 4 番目は、レビ記 18:21。『また、あなたの子どもをひとりでも、火の中を通して、モレクにささげてはならない。あなたの神の御名を汚してはならない。わたしは主である。』『汚す』という言葉が“ハウラル”です。この「神の御名を汚す」ということは、神ご自身を冒瀆するという意味であります。その他にも“汚す”というのは、神を汚さない場合は、儀式的に、儀礼的に、宗教的に汚れるとか、性的に汚れるとか、契約を神との約束も含めて破る時にも汚れると、そういう用途があります。非常に豊かな意味です。文脈でそれらを判断する必要があります。

そして、その文脈ということで創世記 4 章、これは“ハウラル”という言葉が如何に訳すべきか。新改訳は「始めた」と訳しています。呼ぶことを始めた。神の名前を、ヤーウェの名前を呼ぶことを始めた。これは口語訳も新共同訳も大体同じであります。

ちなみに旧約聖書のアラム語訳聖書。旧約聖書はヘブル語・ヘブライ語というもので書かれていたものを、いろんな国の言葉に翻訳して、特にイスラエルがバビロン捕囚の時にはアラム語というのが主要語になっていたわけです。世界の共通語になっていたの、その時にはヘブル語ではなくてアラム語が使われるようになって、聖書もアラム語に訳されていくわけです。それを『タルグム』と言います。この『タルグム』というのは、ヘブル語で「翻訳」という

意味です。そのアラム語訳の旧約聖書では、**創世記 4 章 26 節**のところを『人々はヤーウェの名によって祈ることをやめた。』と訳しています。正反対です。始めたではなくて、やめたんだと、訳しています。これはユダヤ教の伝統に則^{のつと}ったものです。また別の訳では『人々は彼らの偶像をヤーウェと呼ぶようになった。』またユダヤ教の『ミシュナ』という、これは『トーラー』と呼ばれる律法の書(つまりモーセ五書)の注解書です。その『ミシュナ』の注解によると『**エノシュの時代に偶像礼拝が始まったんだ。**』と解釈されています。この他にも多くの権威あるユダヤ教のラビたちも同様の見解を表明しています。そうなりますとこの箇所は『**主の御名を汚し始めた。**』『**主の御名を冒瀆し始めた。**』と解釈することも可能だということです。エノシュの時代に主の御名を冒瀆した人々と言えば、カインの息子のエノク。そして孫のイラデの時代から始まったわけです。カインが建設した町、息子の名にちなんでエノクという名前が付けられましたが、それは**創世記 5 章**のエノクとは別人です。そのカインの造った町、エノクがまさにその主の御名を冒瀆する町として中心地になったかと思います。実際にカインの末裔のレメクの話先週して終わったんですが、そのレメクに至っては公然と神を冒瀆しています。一夫一婦制という神の定めた結婚制度を退けて、一夫多妻を彼は始めました。神の定めにとごとく逆らったわけです。そしてその 2 人の妻に向けて歌った歌には、神への冒瀆の感情が確かに現われています。それ以降カインの子孫たちによって神なき文明は開花していきますけれども、それも神を冒瀆する墮落した社会として後に大洪水が起こって破滅に至ってしまうわけですが、そのような大洪水による滅亡。その前に、もうエノシュの時代に人々は**主の御名を汚すことを始めていた**と。その悪が極まって大洪水に結びついていくという、そういう流れになっていきます。この**創世記 4 章 26 節**の後に、**5 章**のアダムの系図の系図が出てきますが、その **5 章**の続きの **6 章**はまさにその主の御名を冒瀆する世相を表しています。悪が極まったと。そこに神の裁きが下されるという内容に繋がっていきます。それが文脈なんです。もしこれが、ヤーウェの名によって祈ることなり、呼び求めることが始まって、公の礼拝が始まって、暗黒社会においても光がそこに見出されるということであれば、何か希望に繋がっていくような話に聞こえるわけです。でもそうではなくて、この話の続きは絶望なんです。もう地球規模の大洪水によって人類が破滅するんです。ただし、神の憐れみ、恵みによってノアの家族だけが助かるわけです。ノアの家族 8 人です。そういう文脈がありますので、そう考えていきますとセツが息子をエノシュと名付けたこともうなず頷けると思います。もう滅びしかないんだと。明るい未来は待っていない。希望のかけらも何もないんだと。息子の命名というのが、当時の時代様相を表現していたと考えられます。セツは神を公然と冒瀆する当時の人々が確実に滅びに向かっていくということを見て嘆いたに違いありません。それで「エノシュ」と名付けたというのが、むしろ妥当かと思います。自然な流れかと思います。そのようにして前後関係を見ながら、文脈によって解釈していく必要があります。それをあまり重視しないと、言葉には豊かな意味がありますので、どうしても主観が入ってしまいます。翻訳者がこうじゃないかな、と勝手に想像して、翻訳者の意に沿った内容に書き換えられてしまう、改変されてしまうという危険があるわけです。ですから私としては、この箇所は『主の御名によって祈った。』というよりも『主の御名を汚した。』つまりヤーウェの御名を冒瀆することを始めた、と理解する方が妥当だということで、皆さんにはそのように私はお伝えしてあります。ただ、多くの注解書とか解説書では、それとは正反対の先ほど話したような公的な礼拝が始まったと。この時から定期的に礼拝を捧げるようになったというふうな理解が多いと思います。でもそれには無理があるということです。問題もあるということを皆さんには指摘しておきたいと思います。

そして、そのことをまた適用したいと思います。私たちに当てはめて、これは私たちににとってどういう意味を成すのか。私たちはこの話を聞いてどのように関連付けていくのか。適用、これが重要であります。ただ聞いて「ああ、そうですか。」で終わるんじゃないで、適用が一番大事です。これをもって私たちはどうすべきなのか、どうしなければいけないのか。御言葉は、聞くだけで終わってはならないものです。御言葉を実行する者になりなさい、というのが神の御心です。

主の御名を汚すということを聞いてすぐ思い出すのは、あの『十戒』の中の第 3 戒。『主の御名をみだりに唱えてはならない。』という、それは皆さんもよく知っている言葉だと思います。この“みだりに唱える”ということをいろいろな解釈をもって理解する人たちがいますが、この“みだりに唱える”という部分。ヘブル語ですと“みだりに”とい

うのは「シャープ」という言葉です。この「シャープ」という言葉は「内実がない、空虚、無意味、価値がない」ということです。出エジプト記 20 章を開いて下さい。『十戒』という言葉は聞いたことがあると思います。『十戒』の第1戒が 3 節の『あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない。』第2戒というのが 4 節以降です。『あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。』その続きも 6 節まであるんです。第3戒、7 節に『あなたは、あなたの神、主の御名を（ヤーウェの御名を）、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。』これが第3戒です。そして、その続きを見て頂くと全部で 10 あります。今取り扱いたいのは第3戒の『あなたは、あなたの神、主の御名を（ヤーウェの御名を）、みだりに唱えてはならない。』という部分ですが、その“みだりに”は先ほどもお話した通りヘブル語で「シャープ」。これは「内実がない、中身がない、空虚、無意味、無価値」。ですから「主の御名をみだりに唱える」というのは、価値のない目的や偽りのために、また悪を行うために悪用するということです。神の名を騙る。神の名を無駄に使う、無意味に使う。日常生活において不用意にヤーウェの名前を用いることが禁じられているものです。

また、古代の社会では、名は実体と力を表すということで、神の名前を使うということは、或いは神の名前を呼ぶということは、具体的な神の力を自分のものにすると。呪文の中に神の名前を含めて言うとか、そういう信仰があったわけです。日本人が例えば「なんまいだ、なんまいだ。南無阿弥陀仏。」とか、そうやって意味もなく唱えたりすることもあると思いますが、そういう神の名前、それを古代の人たちは神の力を引き出すために、その力にあやかるために使うと。そういう異教的な使い方も禁じているわけです。ヤーウェという神の名前を、そのような異教の信仰に倣って無駄に使ってはならないと。神の力を利用するような、名前さえ持ち出せば神の力にあやかれるような、そんな誤った信仰をここでは禁じているわけです。

他にもユダヤ人たちは、この“ヤーウェ”というのはヘブル語で「ヨッド・ヘイ・バープ・ヘイ」というヘブル語のアルファベットを並べて、英語ではアルファベットで表現すると“YHWH”という表現であります。それは『神聖 4 文字』というふうにも言います。それはあまりにも神聖なものですから口にしてはならない。口にすることすら禁じる、という拡大解釈をして“ヤーウェ”という名前はもう一切口から出してはいけな。その代わり“主”と、ヘブル語で“主”というのは「アドナイ」と言うんです。“ヤーウェ”はもうみだりに唱えてはいけな。ので一切発音しないで、代わりに「アドナイ」という主人を意味する言葉、“主”という名前で代用すると。そんなふうな読み替えをして、この第3戒に触れないように細心の注意を払ってきたというユダヤ教の歴史があります。でも、単に“みだりに”というのは、「無意味に、無駄に」ということですから、別に“ヤーウェ”という名前は無駄にしなければいいわけです。無意味に使わなければいいわけです。なかなかそのような無駄に使うということは、私たちには実感がないかもしれませんが、例えば英語圏では“*Oh my God!*”。驚いたら日本人も最近は小さな子供でも“*Oh my God!*”なんていうのでビックリしますが。でも、また、それを略して *OMG* と、よくメールとかでも *OMG* と使ったりするわけですが、それは最たるものです。主の御名をみだりに唱えているわけです。ただビックリしたから“*Oh my God!*”。本当は「オー、神様！」と言って終わりなんです。驚く時に「オー、神様！」と言うだけで、神様を呼び求めているわけではないんです。無駄に使っているわけです。クリスチャンは、ですから使うべきではありません。クリスチャンで“*Oh my God!*”と言った場合は、その後に続きが必要です。神様に呼びかけているわけですから、そこで終わらないで欲しい。ただビックリしたから、神様の名前をちょっと言うだけです。失礼もいいところです。呼びつけておいて、何も続きがないと。名前だけ呼んで、あとは知りません。そんな非礼なことではないです。また英語圏では“*Jesus Christ!*”と叫びます。「イエス・キリスト！」これも意味のないことです。日本語で言えば「なんてこった！」とんでもない冒瀆です。日本人はそういうふうな慣習はありませんけれども、そういう欧米はキリスト教圏なので、やはり神様という存在が、イエス・キリストという存在が生活の中に密着したりしているので、つい日常の中に使ってしまうこともあるわけです。意味もなく無駄に使うこともあるわけです。うんざりした時にも“*For god sake*”という「頼むよ！」みたいなニュアンスで使ったりします。そして、嘘偽りのないことを言う時にも“*I swear to god*”「神に誓います。」誓ってないんです、本当は。でも、嘘偽りがないということを言いたいのがために、神という名前を使うんです。「神に誓って」と。日本にも「神に誓って言う」とか

言っても、実際には神様には何も誓ってないわけです。相手を罵る時にも神の名前を使います。”God damnit!”あまり口にすべきではないんですが、罵る時にも使います。「このやろう！」と日本語で言えばそういう意味です。くしゃみする時にも”God bless you.”と、それはまだかわいい方ですけども。魂が抜けてしまうという迷信があるので、くしゃみする時に”God bless you.”と、「お大事に」ということをただ言いたいただけなんです、本当は。魂が抜けてしまったら大変ですから”God bless you.”と。「神様の祝福が、ご加護がありますように。お大事に。」という、ただそのときに使うだけです。でもこれもあまり適切とは言えないかもしれません。喜びとか、ホッとしたという安堵感を表す時も”Thank God.”「神に感謝します。」これはクリスチャン、ノンクリスチャン関係なく「ああ、よかった。」という時”Thank God.”英語でそういうことを言っている人は、「神様のことを本当にこの人は信じているんだ。神様に感謝しているんだ。」と勘違いしてはいけません。ノンクリスチャンでも平気で使います。「助かった。うれしい。」という時も”Thank God.”クリスチャンが使えば何の問題もないんですが、ノンクリスチャンでもよく使います。冒涇しないために”Oh my God!”と言わないで、ただ”Oh my!”で終わるというそういう技もあります。”God”の代わりに”Oh my Goodness!”とか、”Oh my Gosh!”とか。”God”を避けるためにいろいろ駆使して、いろんな言葉を編み出したりするんですけども、また”Oh my heaven.”とか、そういう言い回しも英語圏にはあります。神様のことを遠回しに言っているんですけども、それを避けるのはそれなりにまだ見込みがあるかもしれませんけれども、”Oh boy!”とか、”Oh dear!”とか、その辺の使い方の方がむしろ英語では適切かと思います。日本語ではそれに相当するものがあまりないので、皆さんにはピンとこないかもしれませんけれども、ユダヤ人の社会でもこの神の御名を日常の中でよく使いますから、みだりに、無駄に、無意味に使ってしまうことがある。そして、それはキリスト教圏でも言えるわけです。もう一つ”Good bye.”という言葉があります。”Good bye.”は、God be with ye.「神様があなたと共にいます。」というのが意味ですから、素晴らしい挨拶です。日本語では「さようなら」。”Good bye.”であれば「神様があなたと共にいますように。」というお別れになりますから、いい挨拶です。でも、これも無意味に使っていたら、もしかしたら『十戒』の第3戒に抵触するかもしれません。

そういう意味もありますし、レビ記 19:12。『あなたがたは、わたしの名によって、偽って誓ってはならない。あなたの神の御名を汚してはならない。わたしは主である。』先ほどレビ記 18:21 も見て、その“汚す”という言葉“ハウラル”という言葉だったと言いましたが、このところに使われている「汚してはならない。」も“ハウラル”です。『わたしの名によって(神の名前、ヤーウェによって)、偽って誓ってはならない。』神の名前を使って偽って誓う。クリスチャンなら当然そんなことは絶対にすまいと思うかもしれませんが、ヤーウェという名前はあまり私たちは口にもしなないと思いますし、日常的に意識しないかもしれませんが、でもヤーウェはイエス・キリストことを指すと先ほど少し触れたばかりであります。クリスチャンという呼び名、これはギリシャ語の“クリスティアノス”から来ています。日本語では「キリスト者」と訳されるわけですが、“クリスティアノス”は「キリストに所属する者、キリストに倣う者、キリストに似ている者、キリストという神の御名を帯びている者」です。そのクリスチャンが神の名前をある意味で背負っているわけです。そのクリスチャンが嘘をつくということになりますと、このレビ記 19:12 の御言葉に抵触することになるわけです。『わたしの名によって、偽って誓ってはならない。』クリスチャンが嘘をつくということは、神の名前によって嘘をつくということに他ならないわけです。ですからこの『十戒』の第3戒^{ひとごと}は他人事ではありませんし、私たちは自分とは関係ないものだとついつい思ってしまいます。「英語圏の人はよくこの罪を犯すようだけれども、日本人は、日本語を使う人たちはそんなことはほとんどしませんよ。」それは全くの誤りです。私たちも注意しなくてはなりません。クリスチャンという存在が、もう神の名前を帯びているわけです。主の名によって私たちは今ここに存在していますから、私たちの言動全て、主の名によるものだ。それがクリスチャンと呼ばれる人たちです。キリストの名によって私たちは、今生活しているわけです。それがクリスチャンです。キリストの名前ではなくて、自分の名前です。それがかつての私たちです。その大きな違いを是非皆さんにここで覚えて頂きたいと思います。古代のエノシュの時代の話をしているようですが、今の現代の私たちの話です。それを適用として考えて頂きたいです。

申命記 18:19～22 も『¹⁹わたしの名によって彼が告げるわたしのことばに聞き従わない者があれば、わたしが彼

に責任を問う。²⁰ただし、わたしが告げよと命じていないことを、不遜にもわたしの名によって告げたり、あるいは、ほかの神々の名によって告げたりする預言者があるなら、その預言者は死ななければならない。』²¹あなたが心の中で、「私たちは、主が言われたのでないことばを、どうして見分けることができようか。」と言うような場合は、²² 預言者が主の名によって(ヤーウェの名によって)語っても、そのことが起こらず、実現しないなら、それは主が語られたことばではない。その預言者が不遜にもそれを語ったのである。彼を恐れてはならない。』これは所謂主の名を騙る偽預言者のことを言っています。これも勿論『十戒』の第3戒に抵触しているわけです。主の御名をみだりに唱えるのは偽預言者である。偽預言者も他人事ではありません。クリスチャンも主の御名を帯びている者として、私たちがイエスの名前を使う者です。特に祈り際には、「イエス・キリストの御名によって(名前によって)祈ります。」と言いながら、祈ったように行動していないならば、あなたは嘘つきです。祈ったように信じていないならば、あなたは嘘つきです。偽りを言っているわけです。誓っていないわけです。『十戒』の第3戒に違反しています。主の名によってあなたがやることなすこと名前だけ使って、実はすべて自分の名前で行っていたということが発覚した場合、それはあなたが偽預言者だという烙印を押されることになるということです。結局は自分の欲望のため。結局は自分の榮譽のため、名誉のため。自分が褒められたいから、自分が注目されたいから、自分が感謝されたいから。イエスの名前を使いながらも、自分の名前で行っていたと。そうであれば、あなたは偽預言者と同じです。

マタイの福音書 7:21～23。『²¹ わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。²² その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし(ヤーウェの名前で預言をし)、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』²³ しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』』ここで言う“わたし”はイエス・キリストのことです。イエスの御名、主の御名、ヤーウェの御名。そして、預言もしたり、悪霊を追い出したり、奇蹟を沢山行うということは可能です。しかし、イエスはそんな彼らのことを「全然知らない。何の関係もない連中だ。不法をなす者ども。」不法ですから、神の名前を使いながら不法なことをしているわけです。その不法の意味については 21 節を見ると、天におられるわたしの父のみこころを行なうようであれば、たとえ神の名前を使って良いことをしても、役に立つことをしても、教会に貢献するようなことをしたとしても、社会に認められるようなことをしたとしても、神の御心にかなわないことならば、イエスは認知していないと言っているわけです。知りもしないと。わたしとは何の関係りもない、というふうにおっしゃっているわけです。気を付けたいと思います。これも偽預言者のことを文脈上言っていますけれども、「私は偽預言者じゃないから関係ない。」と思っはなりません。キリストの名を帯びる者として、キリスト者として、キリストの名を使う者として、キリストの名によってことを成す者として、これを厳粛に受け止めて頂きたいと思います。ここにも私たちはイエスの名によって集まって来たはずですが、なのに、その名を使って神の御心外のことを今皆さんが行っているならば、思っているならば、それはイエスとは何の関係りもないビジネスです。

もう1箇所、マラキ 1:6。『⁶ 子は父を敬い、しもべはその主人を敬う。もし、わたしが父であるなら、どこに、わたしへの尊敬があるのか。もし、わたしが主人であるなら、どこに、わたしへの恐れがあるのか。——万軍の主は、あなたがたに仰せられる。——わたしの名をさげすむ祭司たち。あなたがたは言う。『どのようにして、私たちがあなたの名をさげすみましたか。』』と。⁷ あなたがたは、わたしの祭壇の上に汚れたパンをささげて、『どのようにして、私たちがあなたを汚しましたか。』』と言う。『主の食卓はさげすまれてもよい。』』とあなたがたは思っている。⁸ あなたがたは、盲目の獣をいけにえにささげるが、それは悪いことではないか。足のなえたものや病気のものをささげるのは、悪いことではないか。さあ、あなたの総督のところをそれを出してみよ。彼はあなたをよみし、あなたを受け入れるだろうか。——万軍の主は仰せられる——⁹ さあ、今、恵みを受けるために神に願ってみよ。これはあなたがたの手によることだ。神はあなたがたのうちだれかを、受け入れてくださるだろうか。——万軍の主は仰せられる。——』続きもあるんですけど、これは祭司のことを言っています。祭司は、神礼拝の奉仕を担当する者ですが、彼らはヤーウェの名を蔑^{さげす}んでいる。どのように蔑んでいるかというと、実際に神に捧げるに相応しくないものをささげているわけで

す。神への生贄としては望ましくないもの、規定に反するもの。盲目の生贄とか、足の萎えたもの、病気のもの、動物の生贄のことを言っていますが、それは価値のないものです。それを総督のところにギフトとして持っていったら、総督はそれを受け取ってくれるだろうか。一般人にもそのようなプレゼントを、ボロをあげるとか、何か汚いものをあげるとか、価値のないものをあげて喜ばれるだろうか、ということを行っているわけです。ましてや、神に対して捧げるもの。「使っていないから、神に捧げます。ゴミ同然だから。別に質屋に持って行っても、ブックオフに持って行っても、ハードオフに持って行っても、オフハウスに持って行っても、それらは全然お金にならない。だったら教会で使ってもらおう。たまたま小銭が余っているから、献金箱に投げ入れよう。」主がそれを喜ぶかということをおっしゃっているわけです。そのように適用して頂きと思います。有り余っているもの、使っていないもの、ボロ、お古。とても、お世話になっている人には差し上げることの出来ないものは、神にも捧げることは出来ないはずです。にもかかわらず私たちは、平気でそれを神に捧げようとします。余り物、残り物、使っていない物、古びた物、どうでもいい物、価値のない物。それで礼拝しているつもりになっている。それで捧げているつもりになっている。それで献金したつもりになっている。というのがここでの指摘であります。そして、私たちも新約聖書では祭司と呼ばれています。キリストに連なる祭司。祭司であり王である、クリスチャンはそう呼ばれています。他人事ではないということです。主の名前を蔑んでいないか？みだりに唱えていないか？エノシュの時代に主の御名は汚されました。そして、エノシュの時代は今も続いております。クリスチャンは他人事としてこれを捉えるのではなくて礼拝の度に、またクリスチャンを名乗る以上は人前であなたの言動は細心の注意をもって成さねばならないということです。あなたが語るの、イエスの名によって語ることだということ。あなたが行うことは、イエスの名によって行うことだということ。祈りもそうです。イエス・キリストの名によって祈っていると言いながら、実は自分の願望だけ並べたてて、単純にマジックワードのようにして、おまじないのようにしてイエスの名前によって祈るというのを最後付け加えているだけで、締め言葉にただ選んでいるだけで特別意味を持たせていないわけです。それは定型文だから、考えもなく、特別信仰もなく、一応末尾につけるべき言い回しとして付けているのであれば、それは『十戒』の第3戒に反していますし、それはエノシュの時代の人たち。つまり大洪水によって滅ぼされる人たちと全く変わらない、同じ者だということです。ですから今、自分の祈りの生活についても振り返って頂きたいと思います。イエスの御名だけ使って実は自分の名前で祈ってはいないか？言いたいことだけ、やりたいことだけ、自分の願いだけを押し付けて無駄にイエスの名前を使っている。それは、主の御名をみだりに唱えていることです。

これは最後になりますけれども、ヨハネの福音書 17 章 6 節。『わたしは、あなたが世から取り出してわたしに下さった人々に（つまり弟子たちに、イエスを信じる者たちに）、あなたの御名を明らかにしました。（ヤーウェの御名は、『わたしはある』というものである。『わたしはなる』というものである。というちょっと意味不可解な不思議な名前でありましたが、イエスがその名を明らかにしました。）彼らはあなたのものであって、あなたは彼らをわたしに下さいました。彼らはあなたのみことばを守りました。』イエスは確かに明らかにされました。ヨハネの福音書 6 章には新改訳は『わたしはいのちのパンです。』でも、直訳は『わたしはあるものである。いのちのパン。』わたしはあなたのいのちのパンになります。それがヤーウェの意味だと、イエスはそう宣言されたんです、そう明らかにされたんです。またヨハネの福音書 9 章では『わたしは世の光です。』わたしはあなたの光となると。そうおっしゃって、ヤーウェの名前を明らかにされたわけです。またヨハネの福音書 10 章では『わたしは羊の門です。』或いは『わたしは良い牧者です。』11 章では『わたしはよみがえりです。いのちです。』14 章では『私は道であり、真理であり、いのちです。』そうやってヨハネの福音書の中だけとつてもヤーウェの御名が何度となくイエスによって明らかにされています。あなたの必要となって下さるお方。そのお方の名前を私たちはほめたたえるんです。その御名を賛美し、感謝を捧げるわけです。イエスご自身が私たちの必要そのものになって下さるのに、私たちはイエス以外のものを願い求めて、しかもイエスの名前を無駄に使って祈っている。これは『十戒』にも明らかに抵触します。そしてそれは、神には喜ばれない行為であります。むしろ悲しまれる行為であります。今日はこれで時間が来しましたので、終わりたいと思うんですけども、エノシュの時代、これは大洪水前の当時の墮落した社会の様相を表しています。主の御名を汚し、公然と悪を

行うような時代。そしてそれが、イエス・キリストが預言された世の終りの時代の前兆でもあるということです。イエスは「世の終りはノアの時代のようにだ。」大洪水前のあの時代のようにだと。エノシュの時代の人々がしたようなことが、世の終りにはまた再現されると言っているわけです。昔からそういうことは続けられてきたと言うかもしれませんが、それがもっと表面化してくる。さらにそれが地球規模、グローバル化してくると。ノアの大洪水は地球規模のものでしたから、局所的なものではないです。一部の人たちの話ではなくて、皆が皆、大半の人たちが主の御名をみだりに唱えて、そして主の御名を汚して冒瀆するようなことが公然と行われる時代。そういう時代にイエス・キリストが裁き主としてまた戻って来られるというのが、聖書の一貫したテーマであります。それが**原福音の『蛇の頭を踏み砕く』**というクライマックスに繋がっていきますので、そのことをまた心に留めて頂きながら、**創世記**の学びを続けて行きたいと思います。適用が一番大事だということは、もう口を酸っぱくして皆さんにお伝えしていますので、イエスの名前を汚すことのないように。もし汚してしまったなと思った人は、この時間悔い改める時間も**主**から与えられていることを信じて頂いて、無駄にしないで欲しいと思います。折角与えられた機会を生かして、神の恵みは尽きませんので、皆さんが「やり直したい。もう一度**主**に喜ばれる選択をしたい。」と、そのように示されたら躊躇なくそうして頂きたいと思います。そのあなたの思いは、**主**がちゃんと知っておられて、受け止めて下さいます。**主**の赦しがあるということ。**主**はあなたを受け止めて下さるということ。私たちはエノシュであって、イエスを信じる私たちは死んでも生きる者ですから、罪を犯してもまた赦されてやり直すことが出来る者だと。何度でも立ち直らせていただける者だということ。これが私たちの希望ですので、是非その希望は握りしめて頂きたいと思います。ではこれで終りたいと思います。